何様朝であつた。

掃き清められた床には水が打つてあつた。

巡査はサーベルを腰に吊つたり、白い手袋をはめたりしてゐた。

三方硝子戸の奇麗な絨氈が敷いてある、應接間に新吉は這入つとれと言はれた。

白いカーテンが掛かつてゐる。

卓子も椅子も贅譯なものだつた。

藍色のテーブル掛けが貼つてあつて、灰皿が置いてあつた。

新吉は椅子に掛けてゐて、遂々其の美しいヂユータンの上へ小便して了つた。

斯うしちや居られない。硝子戸を引き上げても高い柵があるので、脱走は難しかつた。

荷物はゆふべの中に刑事にすつかり取り上げられてゐた。

新吉は覺悟を決めた。

巡査達のならんでる前へ行つて落ち着いて土間へ降りて草履を穿いた。

それから隙きを見て、玄關の入り口のドアーを押して出るなり往來へ驅け出したのだつた。